

消えてくダイニング

作・泉
晟

大輔	杵淵	大輔	父
綾子	杵淵	綾子	母
大和	杵淵	大和	兄
真綾	杵淵	真綾	妹

【零】

ダイニングテーブルと四つの椅子。

テーブルにはクロスが、部屋には花瓶などの装飾が複数置いてある。

ダイニングはキッチン、玄関、それ以外の部屋に続く廊下と繋がっている。

ダイニングと玄関の境界には扉がある。

照明がダイニングを照らす。

大輔、来る。

大輔 皆さま本日はご来場いただき誠にありがとうございます。私、杵淵家の家長を務めております、杵淵大輔と申します。開演に先立ちまして皆様にくつかお願いがございます。(諸注意を述べる)また、ここはダイニング、食卓、すなわち家族が食事を楽しむ場でございます。なので、携帯電話の電源をお切り頂くようお願いいたします。コールやバイブレーションが鳴る空間で落ち着いた食事は行えませうでしょうか？我が家のルールにも食事中の電子機器の操作を禁ずる、という項目があります。なにとぞご理解とご協力をお願いいたします。

着信音。

大輔 あ、今しがた携帯を鳴らしたお客様、今すぐ携帯の電源を……。

真綾 そうそう、今家、うん。えー、やだよ。もう遅いし。うん。うん。あはは、行くか！遠いって。

真綾、来る。椅子に座る。

大輔 (真綾をじつと見る)

真綾 うん、うん。(気づき) あ、ちょっと待って。なに？

大輔 仕舞いなさい。

真綾 なんで？

大輔 周りを見なさい。

真綾 ……ああ。ごめん、ちよつと一回切っていい？うん、ごめんね。はい、ごめんね。(携帯を仕舞う)

大輔 失礼しました。えー、重ねて皆様にお願いがございます。ここはダイニング、卓、すなわち家族が食事を楽しむ場所ではございますが、会場での飲食はご遠慮いただいております。どうか、皆さまご自宅で大事なご家族との食事を楽しんで頂

大和、来る。お菓子を食べている。

大輔 (大和をじつと見る)

大和 (気づき) なに？

大輔 仕舞いなさい。

大和 なんで？

大輔 周りを見なさい。

大和 ……ああ。(お菓子の口を閉じて机の上に)

真綾 怒られてやんの。

大和 うるせ。

大輔 やめなさい。

子供ら はい。

大輔 重ねて失礼しました。えー、恐縮ではございますが皆様にもう一つお願いを申し上げます。ここはダイニング、食卓、即ち家族が食事を楽しむ場所でございます。その為、公演中の許可のない撮影および録音は禁止させていただきます。どうか家族のプライバシーをお守り頂くようお願いいたします。加えて、ツイッター等のSNSでの会話内容の拡散もご遠慮ください。感想はネタバレ厳禁で、はい、どうかお願いします。

綾子、来る。カメラで大輔を撮る。

大輔 (綾子をじつと見る)

綾子 あら、カメラ目線ね。(撮る) おとうさん、もっと自然体で。

大輔 仕舞いなさい。

綾子 なぜ？

大輔 周りを見なさい、子供じゃないんだから。

綾子 ……あら、失礼。(観客にへこり)

真綾 ママ、ママ。

綾子 綾子？

真綾 ピース。
綾子 あら可愛い。(撮る)
真綾 イエーイ。
綾子 ほら、大和も。
大和 いいよ、そんなの。
綾子 あらあら。
真綾 うわ、照れてるよ。
大和 うるせ。
大輔 やめなさい。仕舞いなさい。
父以外 はーい。
大輔 大変失礼しました。えー、本公演は上映時間九十分を予定しております。また、途中に朝食を一回、昼食を一回、夕食を二回、おやつを二回挟む予定です。皆さんは飲食で きませんが、雰囲気をお楽しみください。
真綾 ママ、今日のご飯は？
綾子 筑前煮。
真綾 ……おつかあ、私ハンバーグがいい。
大和 俺、筑前煮でいい。
真綾 えー。
大輔 なんでも好き嫌いせず食べなさい。
真綾 うーん。
綾子 筑前ハンバーグ。
大和 え。
真綾 え。
大輔 え。
綾子 駄目？
母以外 駄目じゃないけど……。
綾子 じゃあ、決まりね。さ、作って来なきゃ(行こうとする)
大和 部屋戻るわ。(お菓子を持って行こうとする)
綾子 お菓子食べ過ぎないでね、ご飯前だから。
大和 大丈夫だよ。
綾子 ほんとに？
大和 ああ。これ、コンソメ味だから。
綾子 ならオツケーね。
大輔 え？
綾子 え？
大和 え？

大輔 いや……。

真綾 電話してくるー。(行こうとする)

綾子 ご飯ご飯。(去る)

大和 ……。(去る)

大輔 えー、このような家族ではありませんが、どうか皆さま最後までお付き合いいただけると幸いです。それでは。お楽しみください。

暗くなる舞台。

音楽。

【一】

落下音。同時に音楽が止まる。

ダイニングテーブルに準備中の朝食。

綾子、朝食の準備をしている。

真綾、来る。

真綾 おはよ。

綾子 あらおはよう。早いわね。

真綾 ちよつとね。

綾子 すぐ食べる？

真綾 一枚。

綾子 自分で焼いてきなさい。

真綾 ちえ。

真綾、キッチンに向かう。

綾子 あ、そうだ。真綾!?

真綾 (声のみで) んー?

綾子 ジャムとバター、持ってきてちょうだい。あと、スプーン。

真綾 はいはい。

綾子 あと、ピーナッツバターとママーレードと、お醤油とソースとマヨネーズとケチャップとしいたけ……。

真綾 (ジャムとバターとスプーンだけ持ってきて) 多い多い多い。一度に頼む量じ

やないから、それ。

綾子 あらそう？

真綾 あと、しいたけって言わなかった？
綾子 うん。

真綾 なに用？

綾子 パン。

真綾 どうやって。

綾子 パンを乗せるの。

真綾 絶対合わないと思うけど、美味しいのソレ？

綾子 いや、美味しいって話なのこれが。パンを乗せるとね。

真綾 ん？パンをつて言った？パンにじゃなくて？

綾子 ヒダにね、パンをちぎって乗せるの。

真綾 絶対やめといた方が良いと思う。

綾子 あら、テレビでやってたのよ。ほらあの、有名なカツコいい男の人、ほら。料理出来る、あの。

真綾 え、誰？

綾子 ほら、いるじゃない。お料理上手な。

真綾 え？なに？もこみち？

綾子 あー、近い近いえつとねー。あ、陳健一。

真綾 めちやめちや遠いじゃん。もこみち遙か彼方じゃん。

綾子 えー、健ちゃんかっこいいじゃない。

真綾 私時々ママの男の人の趣味分からなくなる。

綾子 あら、お父さんとお母さんの子供の癖して。

真綾 癖してって言うかな子供に。

綾子 さ、取ってきましょう。

綾子、キッチンに向かう。

真綾、テレビのリモコンを探す。

真綾 あれ、リモコン。まあ、いっか。

真綾、テレビに直接接触って電源をつける。

真綾、椅子に座る。

真綾 ママー。

綾子 はい？

真綾 たくあんつてあるー？

綾子 あるわよー。

真綾 取ってきてー、パンを乗せると美味しいんだってー。
綾子 へー、そうなのー。

真綾 (テレビを見て) ほんとなあ？を、だもんなあ。

大輔、来る。

真綾 おはよう。

大輔 おはよう。

真綾、父の顔をジッと見つめる。

大輔 なんだ？

真綾 似てないよねえ……。

大輔 誰にだ。

真綾 健ちゃん。

大輔 健ちゃん？

綾子 はいはいはいお待たせお待たせ。あら、お父さんおはようございます。

綾子、凄い量の調味料を箱に入れて持ってくる。

大輔 ああ、おはよう。

綾子 あ、ごめんなさい。新聞取ってきてないわ。すぐ取ってきますね。よいしょ。

(次々調味料を机に置く)

大輔 (見かね) いいよ、自分で取ってきて来る。(玄関に向かう)

綾子 あ、ごめんね。お願いします。真綾、パンもうすぐ焼けるわよ。お母さんの分も一緒に取ってきて来てちょうだい。

真綾 あ、うん。

綾子 あと……はい。(たくあんを丸のまま一本渡す)

真綾 (受け取る) ありがとう。

綾子 切るの？

真綾 開いて乗せるの。逆ホットドック。

綾子 じゃあ、はい。(包丁を渡し)

真綾 (受け取り) わー、用意いいねえ。

綾子 でも、変わった食べ方ねえ。

真綾 しいたけも相当よ。

綾子 そう？

大輔 (戻ってきながら) なんだそれは。

母娘 (顔を見合わせ) たくあん。

大輔 うん。えっと……(食卓を見回し) 今日のご飯か？

綾子 パンよ。

大輔 だよなあ。

真綾 乗せると美味しいんだって。テレビでやってたの。

大輔 またお前は母さんに似て。すぐそうやってテレビや雑誌の真似をする。

真綾 なによ、良いでしょ。美味しいって言ってたんだから。ねー。(綾子に)

綾子 ねー。うしー。とらー。うー。たっー。みー。

真綾 何で干支？

大輔 まあいい。好きにきなさい。危なくないようにな。

大輔、座って新聞を読み始める。

真綾 はい。

綾子 あ、真綾。パン。

真綾 あ、そうだった。えっと……。

真綾、たくあんの所在を悩み、大輔の皿に置く。

真綾、キッチンに向かう。

綾子 お父さん。

大輔 なんだ。

綾子 昨日はよく眠れましたか？

大輔 ああ。どうしたんだ急に。

綾子 その言いくいんだけど。

大輔 どうした。

綾子 最近、あなたうなされているから。

大輔 ええ？(半笑いで)

綾子 ほんとよ。毎晩毎晩、うーうーうなされているわ。

大輔 ははは、大丈夫だよ。そんなに心配しなくても。(新聞を降ろし、たくあんに気付く) なんだこれは？

真綾 (声のみで) おとうさん、パン何枚食べる？

大輔 え、あ、二枚！

真綾 二枚？

大輔 ああ！

真綾 もうひとこえ！
大輔 え？
真綾 もうひとこえ！
大輔 ……二枚、半！
真綾 まだまだ！
大輔 ……三枚！
真綾 まだいけるよ！
大輔 三枚半！
真綾 おっけー、焼いとくねー。
大輔 競りみたいだな。多いだろ、三枚半は。
綾子 昨日も一昨日も、その前もずーっとうなされてました。
大輔 ああ、そうか。
綾子 なにか悩みがあるんじゃないか。
大輔 いや、思い当たるところは……。
綾子 本当に？
大輔 ああ。
綾子 私毎晩心配で。
大輔 すまないな、しかし大丈夫だから。
綾子 病院とかは。
大輔 なにちよつと疲れが溜まっているだけさ。この週末ぐっすり眠るよ。

真綾、パンを皿に乗せ戻って来る。

真綾 はいママ。
綾子 ありがとう。
真綾 あ、パパそれとって。
大輔 どれ。
真綾 それそれ。
大輔 ああ。ちゃんと言いなさい。(たくあんを渡す)
真綾 ごめん、ありがとう。包丁包丁。
大輔 キッチンでやった方がいいんじゃないのか。
真綾 えー、めんどくさいじゃん。
大輔 まな板もないし、ケガでもしたら。
真綾 はいはい、心配性だなあ。あ、ママ。
綾子 はい？(パンをちぎっている)
真綾 毎晩毎晩夜遅くにお経？般若心経？唱えるの止めてくれない？あれ結構響く

から私の部屋まで聞こえてきちゃうんだ。

綾子 ああ、ごめんごめん。通信講座で。

真綾 どんな通信講座よ。

綾子 月刊仏滅。

真綾 滅しちや駄目でしょ仏。

綾子 あるのよそういうのが。

真綾 兎に角止めてね。

綾子 ごめん、小さくするわ。

真綾 うん。さ、切ってこよー。

真綾、たくあんを持って行く。

綾子、パンを千切りながら般若心経を唱えている。

大輔、綾子をじっと見る。

綾子 (視線に気付く) ちょっとなにお父さん？見ても私は増えないわよ。

大輔 ……増えないさ。

綾子 そうよねえ。見て増えるのは、見て増えるのは、ねー？

大輔 見切り発車ならやめなさい。

綾子 うふふ。

大輔 なあ、母さん。私がうなされているのって……。

大和、来る。

綾子 あ、大和おはよう。

大和 ……はよ。

綾子 朝パンだけど、食べる？

大和 ん。

綾子 自分で焼いてね。キッチンにあるから。

大和 ん。

綾子 聞いている？

大和 ん。

大輔 大和、ちゃんと返事しなさい。

大和 うん。

大和、とぼとぼキッチンに向かう。

大輔 全くあいつは高二にもなって、ぼーっとして。
綾子 まあまあ、思春期なもの。
大輔 ……それで私がうなされてる件について。

真綾、たくあんの半分を持ってくる。

真綾 ママ、たくあんの残りどうすればいいかな。すっごい湿ってるんだけど。
綾子 あらあら、そうねえ。どうしましょ。
真綾 びっしやだよ、びっしや。
綾子 そうねえ……。

大輔、諦めて新聞を読んでいる。

綾子 あ、お父さん。
大輔 なんだ。
綾子 それ、貸してもらえますか？
大輔 ん？
綾子 それ。新聞。(新聞を示し)
大輔 え、ああ。(差し出し)
綾子 ごめんなさい。(受け取り) 真綾、これに包んどいて。
真綾 はーい。冷蔵庫？
綾子 うん、冷蔵庫。
真綾 はーい。(たくあんを包みながら去る)
大輔 ……。

大輔、手持無沙汰になる。
綾子、パンを千切る。

綾子 あ、お父さんパン、そろそろ焼けたんじゃない？
大輔 え、ああ。あの……。
綾子 なに？
大輔 いや、なんでもない。
綾子 もう、変なお父さん。
大輔 はは……。(釈然としない)

大輔、キッチンに。

入れ替わるように大和と真綾がくる。

大和、生の食パンをかじっている。

真綾、皿にたくあんとパン。

真綾もパンをかじっている。

真綾 それ美味しいの？

大和 ああ……。

真綾 生じゃん。焼いた方がいいんじゃない。

大和 うーん。

真綾 それじゃ刺身じゃん、パンの刺身、六枚おろし。

大和 刺身？刺身か……。

真綾 大根いる？

大和 なんで。

真綾 ついてるじゃん、刺身に。あ、菊の花。

大和 よく考えたら一回焼いてんだから刺身じゃないだろ。

綾子 二人とも座って食べなさい。行儀悪い。

真綾 はい。(座る)

大和 うーん。(座る)

真綾 大丈夫？

大和 なにが？

真綾 なんか眠そうだから。どしたの？

大和 なんか、寝てたらお経が……般若心経。

綾子 お経？

大和 なんか、寝てつと聞こえんだよ、最近。

綾子 きつと気のせいよ。疲れてるのよ。

大和 気のせいじゃないと思うけどなあ、どっから聞こえてくんだろ。

綾子 真夜中にお経が聞こえるわけじゃないじゃない。

大和 そうなんだけどさ……。

綾子 気になるんなら、耳栓、買ってあげようか？

真綾、驚愕の表情で綾子を見ている。

大和 いや、いい……。ミルクない？

綾子 はい。(取る)

大和 ありがとう。

真綾 ね、ね、ね、ママ、お経ってさ。

綾子 真綾、オレンジジュース？
真綾 え、うん。
綾子 はい。(押し付け気味に渡す)
真綾 うん、あのさ、お経……。
綾子 バターいる？
真綾 いえ、いいです……。
綾子 喋ったら塗るわよ。
真綾 どこに？
綾子 ドアノブ。
真綾 わーお、ヌルヌル。
大和 あー、口ばっさばさ。ジャム取って。
真綾 あー、イチゴ？
大和 うん。
真綾 はい。
大和 優しい。

大輔、パンを皿に乗せてくる。

大輔 多いな、多いよな……。?
真綾 (テレビを見て) あ、この人また不倫したんだ。
綾子 いやねえ、朝から。
大輔 母さん、バター。(座りながら)
綾子 はいはい。(渡す)
大輔 ありがとう。
大和 また、って前もしてたの？
真綾 うん。なんか、二年前ぐらい。車の中で密会だった。
綾子 そうだったそうだった。毎日やってたわね、ニュースで。
大和 今回は？
真綾 え？
大和 いや、前回車なら今回どこだろうって。(真綾の頬にパンが付いていることを教える)
真綾 ん、ああ。え？車じゃないの？(パンのカスを取る) 取れた？
大和 うん。二回同じとこですか？
綾子 分かんないわよお、男の人ってそういう時鈍いから。ねえ？(大和と大輔に)
大和 実の母のそのコメントはどう対応していいの分かんないよ。
真綾 今から言うんじゃない？車かホテルか、それ以外か。

家族、食事。

沈黙とテレビの音。

大輔 大和、真綾、食べてるときに肘をつかない。
子供ら はーい。

大和 うえー、ばかだなー。

綾子 新幹線であつて、乗り物好きなのかしらねえこの人。

真綾 凄いバレバレだよ、揺れるし。

大和 そりゃ週刊誌に抜かれるわ。

大輔 そのスリルが良いんだろう。

父以外 ……。(父を見る)

大輔 すまん。

綾子 美味しい？(真綾に)

真綾 イマイチかも。あれ、しいたけは？

綾子 切らしてたのよ。いっぱい買ってたはずなのに。

真綾 この前の筑前ハンバーグで使い切ったんじゃない？

綾子 そんなことないと思うけど。

大和 しいたけ？なにしいたけって？

真綾 パンに合うんだって。

大和 ああ、マッシュルーム的な？

綾子 そうそう。

真綾 マッシュルームって何？

大和 え？キノコ。

真綾 嘘だ。キノコって何々ダケってつくじゃん。シイタケとかマイタケとかシメジ

タケとか。

大和 マッシュルームは外国のなんだよ。

真綾 じゃあ日本語でなんて言うの？

大和 え？

真綾 日本語で、やっぱり何々ダケなの？

大和 ……父さん。

大輔 え？

大和 マッシュルーム、日本語で。

大輔 え、マッシュルーム、え、ガイコクダケとかじゃないか。

子供ら、ピンと来ていない。

大輔 すまん。
大和 いや。
大輔 大人にも分からないことはある。
大和 いいって。
大輔 トリユフの日本語はセイヨウショウロということは知っている。
大和 なんでそっちは知ってるのさ。
大輔 円周率も五十桁まで言えるんだ。
大和 いいってば、
大輔 一、一、二、三、五、八、十三、二十一、三十四、五十五、八十九。
大和 それフィボナッチ数列だよ。
大輔 く、から、く、かり、し、き、かる、けれ、かれ。
大和 古文のク活用ね、分かったから。
大輔 大人は物知りなんだぞ。
大和 なんか物知りとは違うでしょ今は。
大輔 大人を舐めるな。
大和 いいってば。あ、そうだ真綾。
真綾 なに？
大和 お前俺の電子辞書知らない？
真綾 知らない。なんで？
大和 いや、見当たんなくてさ。なんか最近、物がよくなるんだよね。
真綾 へー。
大輔 ちゃんと整理整頓してないからじゃないか。
大和 してるよ、そこそこに。
大輔 リュックの中とかじゃないのか。学校に持って行く。
大和 いや、結構探したんだけど見当たんなくてさ。
真綾 私、知らないよ。
大和 まじで。教室かなあ、月曜までの宿題あんだよね。
真綾 英語？
大和 うん。
真綾 私の英和いる？
大和 マジで、サンキュ。
真綾 あ。
大和 ん？
真綾 時々あの、単語に赤丸してるけど気にしないでね。
大和 え、うん。予習の名残だろ？そういうとこ良いよな紙辞書は。

真綾 ううん、やらしい単語に丸してる。
大和 言うなよそんなこと。
真綾 するでしょ？
大和 するう。
大輔 食事中だぞ。
子供ら ごめんなさい。
綾子 ……キクラゲ。

母以外、綾子に注目。

綾子 ……キクラゲ。
真綾 え？
大和 なに？
綾子 何々ダケじゃないキノコ。
大和 母さんそれ探すためにずっと黙ってたの。
綾子 あと、エリンギもそうね。
大和 ああ、そうか。それもそうか。
大輔 サルノコシカケ。
綾子 あっ、やられた！
大和 やられたってなんだよ。
綾子 次は大和のターンね。
大和 しりとりみたいにするなよ。
大輔 早く答えなさい。
大和 えっ…えっと。(考え込む)
真綾 ごちそうさま。
綾子 あら、はいわね。
真綾 ちよっとね。
綾子 おでかけ？
真綾 うん、クラスの子と。
大輔 なんだ、男か？
真綾 父親が躊躇いなくそれ聞くのどうなの？
大輔 男なのか？
真綾 圧力すごい。男の子もいるけど、八人くらいでいくから大丈夫だよ。買い物行ってカラオケ。文化祭の準備ついなんだ。
綾子 あら、いいわねえ。晩御飯は？
真綾 そんなに遅くなんない。多分、五時くらい。

綾子 じゃあ、大丈夫ね。
真綾 うん。
大輔 車に気を付けてな。
真綾 高校生だよ？もう、小学生じゃないんだから。
大輔 男に気を付けて。
真綾 やめろってそれ。
綾子 お小遣いは？
真綾 いいよ、そんな。じゃ、ごちそうさまでした。
綾子 はい。
大和 あっ！なめこ！なめこそうだ！はい、真綾のターン！
真綾 冬虫夏草。

真綾、去る。

大和 やられた……。
綾子 いいわねえ、友達とお買い物。
大輔 心配だ。
綾子 心配し過ぎよお。あの子も高校生なんだから。
大輔 うん……。
綾子 遊びたい盛りなんだから。いいじゃないたまの休日、お買い物して、カラオケ行って、帰り道送ってもらって、ちょっと男の子とキスしたって。
大輔 あー！やめろ！やめなさい！
綾子 あらあら。
大輔 そんなそんな破廉恥な、お父さんは許さんからな！（真綾の去った方に向かって）
大和 すっげ、ライオンキングみたいだ。
綾子 大和は？
大和 え？
綾子 今日、どうするの？
大和 いや、なんもないよ。宿題あるし。家いるよ。
綾子 文化祭は？何も準備しなくていいの？
大和 うちのクラス食い物だから、接客するだけだし、準備とかないよ。
綾子 なに出すの？
大和 えっとお、アイス、お好み焼き。
大輔 ほー。
綾子 アイスとお好み焼きなんて海の家みたいね。甘いのとしょっぱいので。

大和 ああ、違う違う。

綾子 え？

大和 アイスとお好み焼きじゃなくて、アイスお好み焼き。

綾子 アイスお好み焼き？

大輔 どういう代物なんだそれは。

大和 小麦粉のさ、薄い生地あんじゃん、お好み焼きみたいな。それにアイス挟んで、

生クリームとかフルーツ乗せて、チョコソースでトッピングすんだよ。

大輔 ……それはクレープなんじゃないのか？

大和 ……あ。

真綾、来る。

真綾 ママ。

綾子 はい？

真綾 私の上着知らない？レザーの。

綾子 レザー？

真綾 レザーは着ないよ、燃えちゃうよ。レザー。

綾子 ああ、黒いの？

真綾 うん。

綾子 洗濯出した？

真綾 ううん。

綾子 部屋にないの？

真綾 ないんだって。

綾子 もう一回探してみなさい。

真綾 うーん。

真綾、去る。

綾子 あ、そうだ。レザーで思い出した。そろそろ洗濯しないと。

大和 その二つにどんな共通項が？

綾子 二人とも、寝間着は？出した？

父子 うん。

綾子 お皿、終わったら持って行ってちょうだいね、流しに。

父子 うん、わかった。

綾子 ごめんだけど、私のもお願いします。

父子 うん。

綾子 ミルク、空いたら洗っておいてね。
父子 うん。
綾子 じゃあ明日、来てくれるかな？
父子 いいともー。
綾子 お願いね。

綾子、去る。

大輔 なんでもいいともなんだ？
大和 乗った俺らも同罪だよ。

二人、黙々食べる。

大輔 一枚食うか？
大和 食べれないの？
大輔 すまん。
大和 (受け取りながら) そんなに焼くからだよ。
大輔 焼かれたんだ。
大和 ジャム。
大輔 ああ。

綾子、来る。

綾子 ねー、二人とも。
父子 はい？
綾子 洗剤知らない？
父子 (顔を見合わせ) 知らない。
綾子 そう。
大和 ないの？
綾子 うん。
大輔 詰め替え用は？この前買っただろう。
綾子 いや、そういうんじゃないよ……。
大輔 なに？
綾子 ないの、容器ごと。中身じゃなくて。大体中身がないだけなら二人に聞かないわよ。

顔を見合わせる。

大輔 買ってこようか、スーパーまで。

綾子 まだやってないんじゃない？

大輔 じゃあ、コンビニにでも。

綾子 うーん、お願い。

大輔 ああ。大和、残り食べていいからな。

大和 あっ。全部押し付けやがった。

大輔 洗剤は、えっと、アタックか？

綾子 トス。

大輔 サープ。

綾子 レシーブ。

大輔 バレーじゃないんだ。なんでバレーの話になると思ったんだ。違う、洗剤はア

タックで良いのか？

綾子 お願い。

大輔 じゃあ、行ってくる。あ、車の鍵。

大輔、去る。

綾子、去る。

大和、テレビを見ながら食べる。

大和 つまんねえな。あれ、リモコン？あれ？

大和、リモコンを探す。見つからないので机の下も。

真綾、来る。

真綾 大和。

大和 あ、なに？（立ち上がり）

真綾 ジャケット貸して。

大和 え、どれ？

真綾 ジージャン。

大和 いいけど、デカくね？

真綾 いいんだって、ブカブカなのが。

大和 いいよ、クローゼット漁って。

真綾 ありがとう。

大和 あ、ついでにさ英和辞典置いといてくれ、机に。

真綾 うん、わかったー。

真綾、去る。

大和、引き続き机の下でリモコンを探す。

大輔、来る。

大輔 大和、その辺りに車の鍵ないか？

大和 え？（立ち上がり）いや、ないとおもうけど。

大輔 そうか。なにしてたんだ、今。

大和 ああ、リモコン、テレビの。見当たらないんだ。

大輔 ないのか。

大和 うん。財布の中とかじゃないの、車の鍵。

大輔 ああ、そうか。変だな。

大輔、去る。

大和、机の下へ。

綾子、来る。

綾子 大和。何してるの？

大和 （立ち上がりながら）いや、リモコンがなくて。なに？

綾子 あんたジーンパン出した？ほら、昨日履いてた。

大和 え？出したよ。昨日の内に。

綾子 そうよねえ……ありがとう。

大和 うん。

綾子、去る。

大和、再び机の下。

真綾、来る。

真綾 ねえ、大和。

大和 （立ち上がり）もう腰が痛い！立ったりかがんだり、かがんだり立ったり！

真綾 え、なに？

大和 いや、こっちの話。なに？

真綾 ないよ、ジャケット。

大和 え？

真綾 ジャケットが、ない。

大和 俺の？
真綾 うん。
大和 クローゼットだぞ？右っかわの。
真綾 うん、探したんだけど。
大和 よく探せて、あるから。絶対。
真綾 ないんだって。

綾子、来る。

綾子 あ、真綾。カーディガン出した？
真綾 え、出てない？
綾子 シャツとかは出てるんだけど。いつもきちんとまとめて出すから。
真綾 あれ？いや、昨日出したよ。
綾子 ほんと？
真綾 うん。
大和 母さん、洗濯物にさ俺のジージャン混じってなかった？
綾子 え、見かけてないわよ。
真綾 クローゼットにないの。
綾子 え？
大和 ジージャン、ない？
綾子 ないと思うけど、変ねえ。

大輔、来る。

大輔 母さん！
綾子 あら、どうしたの。
大輔 母さん、母さん、あれ、知らないか、あれ。
綾子 え、なに？どうしたの？
大輔 あれが、ないんだ、あれが。
綾子 だからなにが？
大輔 その、いつもあの、棚の、三段目に入れてる、あの、ほら。
綾子 ちよっとお父さん落ち着いて、何が見当たらないの？お財布？免許証？
大輔 ……うちの銀行の通帳と印鑑。

間。

父以外 え？

暗転。

【二】

落下音。

明転。

大輔、沈痛の面持ちで座っている。

真綾、座っている。

綾子と大和、机で真剣に話し込んでいる様子。

綾子 しいたけ、洗剤、リモコン、電子辞書、真綾のレザーとカーディガン、大和の

ジージャンとジーンズ、お父さんの車の鍵に、通帳と印鑑。

大和 えっと最初になくなったのに気づいたのはこの辺？

綾子 うん。

大和 で、調べてみたら。えっと、俺のギターの六弦、父さんの書きかけの大河小説、母さんの裁縫道具からまちばりが全部、それと真綾のおやつプリン。

真綾 プリンは誰かが食べたんじゃないの？

大和 でも、名前書いてたんだろ？書いてたらウチの家族は誰も食わないよ。

綾子 杵淵家ルール第三条、名前の書いてるおやつには手出し禁止、よねえ？お父さん。

大輔 ん、ああ。

大和 続けるよ？えー、来客用のお茶碗とお箸、しゃもじ、マイナスドライバーの一番ちっちゃいやつ、月刊仏滅六月七月八月号、お茶漬け海苔、月刊仏滅創刊号、それと庭の花が一本。

真綾 花は枯れたんじゃない？

大和 そんなすぐに？

真綾 わかんないじゃん、生き物なんだし。

綾子 杵淵家ルール第五条、生き物は大切にしましょうがあるもの、そんなすぐに枯れないわよ。ねえ？お父さん。

大輔 そうだな。

大和 で、冷蔵庫からキュウリ、ゴーヤー、かぼちや、ズッキーニ、メロン、冬瓜がなくなっていると。

真綾 なんでウリ科ばかり？

大和 好きだったんだろ、犯人が。
真綾 ウリ好きなのはどっちかっていうとウチの一家でしょ。
綾子 杵淵家ルール第二十五条、野菜はしつかりとりましようを知ってる可能性があるわね、犯人は。ねえ？お父さん。
大輔 ああ……それは違うんじゃないか？
大和 あ、よかった。まともなりアクションだ。
真綾 全肯定状態だったもんね。
綾子 お父さん、あんまり落ち込まないで。銀行も止めてもらったんでしょ？お金も減ってないみたいだし。
大輔 だがなあ、心配だよ。
綾子 気にし過ぎても仕方ないわよ。
大輔 私の大河小説がばら撒かれていないか。
大和 そっちかよ。
大輔 書きかけなんだぞ。書きかけが流出するのが一番堪えるんだ！分かるだろう！
綾子 三年間かけて書いてた大作だから。
大和 それで書きかけなのは筆が遅いだけだよ。
大輔 ぐっ！（胸をおさえる）
真綾 あっ、急所だった。
大和 でもさあ、ホントに泥棒なの？これ？
大輔 こんなに物がなくなっているんだ、泥棒以外ないだろう。
大和 でも、昨日警察の人も言ってたじゃん。人が侵入した形跡はありませんって。
大輔 それも確実じゃないだろう。証拠が出ていないだけかもしれない。なにより、物がなくなっているのは確かなんだから。
大和 うーん、そう言われると。でもさ、なんでこんな盗ってくんだろうな。
綾子 そうよねえ、まちばりと洗剤なんて何に使うつもりかしら。
真綾 父さんの大河小説も。
大輔 それは盗るだろう。盗るだろう。（大和に）
大和 聞くなよ。
真綾 素人の作品でしょ？
大輔 ぐうう……。 （苦しそう）
真綾 やった、また急所だ。
大和 それなら俺のギターの六弦つても意味わかんないだろ。一本だけで何すんだって話だよ。
綾子 そうよねえ。ギター丸ごと盗っちゃえばいいのに。
大和 だよね。
真綾 それより服盗られてるの気持ち悪くない？凄く怖いんだけど。

大和 俺なんて、ジージャンとジーンズだぞ。なんだ、犯人はジーンズファクトリーの回し者かよ。

真綾 え、なに？

大和 だから、上下両方ジーンズ素材だから、ジーンズファクトリーの回し者がさ、こう加担して、ほら、さあ。

真綾 それ、もつと詳しく。

大和 やめろよ、悪かったって。

綾子 物はあれだけど、沢山持って行かれちゃったわね。

大輔 まあだが、現金に手を付けられていないことと、家族が皆五体満足なのがせめてもの幸いだな。家族の身に何かあったらと思うと。

綾子 そうね。それが一番ね。

真綾 でも、怖いよ。四人もいて誰も気付かなかったんだよ。それって、すごく怖くない？怖いよ。

綾子 大丈夫よ、真綾。

大輔 盗難届も出したし、警察の人もこの辺りを巡回してくれるそうさ。そのうち捕まるさ。日本の警察は優秀なんだから。

真綾 うん。

大和 にしても、凄腕前だよな。盗られたことにすら気付かなかったんだから。ルパンだよ、ルパン。盗ってく物はなんか、スケール小さいけどさ。

大輔 まあ、あまり話していても仕方ない。犯人のことは警察に任せて、私たちはできるだけ普段通り過ごそう。警察の方も、リアクションが目的のストーカーの犯行かもしれないと言っていたし。私たちは出来るだけ、普段通り、いいな。

子供ら うん。

綾子 さ、ご飯にしましよ。て言っても、今日も店屋物だけど。なんだかお買い物に行きにくいし。またお蕎麦でいい？

大和 ラーメンは？ほら、商店街の中華屋。

真綾 あそこ脂っこくて嫌い。

大和 中華は脂っこくてなんぼだろ。

真綾 バンバンジー。

大和 え？

真綾 脂っこくない中華。

大和 ああ。それ食べばいいじゃん。

真綾 パサパサして嫌い。

大和 なんだよ。

綾子 あそこの中華屋、今休業中なのよ。

大和 え、なんで。

綾子 あそこも泥棒が入ったらしいの。
母以外 ええ？
大輔 ほんとか？
綾子 うん。向かいのおばあさんが言ってたんだけど、二、三日前に泥棒が入って、中華鍋がごっそり持ってかれちゃって、料理できないって。
大輔 物騒な世の中になったもんだなあ。
大和 それさ、同一犯じゃないの。
真綾 やめてよ。
大和 だって、怪しいじゃん。中華鍋なんて盗ってどうすんだよ。
真綾 作るんじゃない、中華。
大和 なに作んだよ泥棒が。
真綾 バンバンジー。
大和 バンバンジー？
真綾 バンバンジー。バンバンジーって何回も言いたくなるね。
大和 ああ。バンバンジー。バンバンジー。バンバンジー。(素早く)
真綾 はーい。
綾子 バンバンジーに中華鍋使うのかしら。
真綾 使わないの？
綾子 蒸し料理でしょ？使わないんじゃないかしら。
大和 へー。
真綾 じゃあ、休業してても作れるじゃん。
大輔 まあ、その辺も警察が何とかするだろう。気にしないように。
真綾 バンバンジーを？
大輔 泥棒を。
真綾 ああ、そっちね。
大輔 そっち以外ないだろう。
綾子 じゃあ、晩御飯お蕎麦でいい？
大輔 いいんじゃないか。
綾子 (メモを出しながら) じゃあ、天蕎麦の人？はい。(挙手)
子供ら はい。(挙手)

父以外の三人、大輔をじっと見る。

大輔 ……。(圧に負けてゆっくり挙手)
綾子 はい、天蕎麦四つね。

綾子、メモを取りながら去る。

大和 父さん、こういうの弱いよね。

大輔 ああ。なんだか昔からプレッシャーには弱いんだ。

大和 それ言うならプレッシャーだろ。なんだよ、新社会人に弱いって。

大輔 青山、春のプレッシャーセール。

大和 押し売りじゃん、それ。

真綾 お蕎麦どのくらいで届くかな？

大和 え？十五分ぐらいじゃない？

大輔 あそこは結構かかるぞ。三十分はかかる。

大和 そんなかかるっけ？

大輔 大将がもう年だからな。

大和 へー。

真綾 じゃあ、明日の予習してこようかな。あ、大和、英和辞典返してもらっていい？

大和 ああ、机の上置いてっから、勝手に取って。

真綾 オッケー。

大和 ありがとな。

真綾 うん。

大和 赤丸、追加しといたから。

真綾 あ、ありがとう。

大和 どういたしまして。

真綾、去る。

大輔 大和はいいのかわ？

大和 なにが？

大輔 宿題とか予習、ないのかわ？

大和 ああ、今日はない。

大輔 ほんとかわ？

大和 ほんとだよ。何疑ってんだよ。

大輔 来年は受験だからな、しっかりするんだぞ。

大和 このタイミングでその話するかな。

大輔 受験の準備は早いに越したことはないからな。

大和 わかっているって、オープンキャンパスも行ったろ、夏休みに。

大輔 うん。しっかりな。

大和 分かっているって。

大輔 真綾の見本になるように。

大和 分かったって。

大輔 (掌を大和に向け) ……フレッシュヤーズ。

大和 プレッシュヤーナ。

綾子、来る。

綾子 ねえ、ちよつと。あら、真綾は？

大和 予習しに部屋に戻ったよ。

綾子 あらそう。なんだか、お蕎麦屋さんに電話が通じないのよ。

大和 あれ？定休日？

大輔 蕎麦屋の定休日は金曜じゃなかったか？

綾子 だから、今日はお蕎麦じゃなくてピザでもいいかしら。

大和 俺はいいけど。

真綾、辞書や教科書を抱えて来る。

真綾 どしたの？

綾子 あ、真綾。今日ピザでも大丈夫？

真綾 え、別にいいけど。なんで？

綾子 お蕎麦屋さんに電話が通じなくて。

真綾 へー。いいよ、別に。

綾子 じゃあ、ピザで。お父さんも大丈夫？

大輔 ん、まあ、しかたない。

大和 はい、ツナコーンピザ。(挙手)

綾子 はいはい。他にリクエストは？

誰も何も言わない。

綾子 じゃあ、間を取ってクアトロフォルマッジにするわね。

真綾 なんの間を取ったのさ。

大和 すっげー好き嫌い別れるやつじゃん。ミックスピザとかでしょ、そこは。

綾子 はいはい、ミックスピザね。

綾子、去る。

大和 お前、予習するんじゃないの？
真綾 怖くなっちゃって。こっちで。
大和 ああ。
大輔 今はどんな勉強してるんだ？
真綾 普通に英語だよ英語。
大和 高一の英語って何してたっけ。

三人、教科書を覗き込む。

真綾 fetch っつなご。
大和 ん、取って、持って来るとか。
真綾 ふーん。Brilliant は。
大和 えー、輝かしいとか、キラキラしてるとか。
真綾 dining は。
大和 食卓。食事を摂るの進行形。
真綾 Disappearance
大和 消失、消え失せること。
真綾 すっげー。
大和 お前の予習だろ。
真綾 大和、辞書要らないんじゃない？
大和 そんな難しい単語じゃないだろ、今のは。ねえ？（大輔）
大輔 ……。
大和 あ、駄目だフリーズしてら。
真綾 英語駄目なんだね。
大輔 ああ、英語は駄目なんだ。子供の頃からの持病でな。
大和 ないよ、そんな病気。
真綾 ねね、次の単語。
大和 自分で辞書ひけよ。
真綾 いいじゃん、まあ。

綾子、戻って来る。

大輔 ピッツアは大丈夫だったか？
大和 ピッツアって言ったぞ今。英語駄目なのに。
真綾 イタリア語だからじゃない？
綾子 ええ。ピザ屋さんは大丈夫みたい。

大輔 蕎麦屋なんだが、もしかしたら大將が倒れたのかもしれないな。大將はもうずいぶん年だったし。

綾子 心配ねえ。大丈夫かしら。

大輔 なにかあったら、町内会で連絡があるとは思うが。毎年、年始の祭りで張り切っていたからなあ。大將が倒れたとなると、来年の祭りは大変だな。

綾子 そうね。何か飲みます？

大輔 ん、じゃあ珈琲を。

綾子 はい。二人は？何か飲む？

大和 じゃあ、俺も珈琲。

真綾 ココア。

真綾以外、真綾をじっと見つめる。

真綾、視線に気付く。

真綾 なに？

綾子 ……珈琲三つにココアね。

綾子、キッチンに向かう。

大和 お前こういう時強いよな。

真綾 なにが？

大輔 フレッシシャー……。

大和 プレッシシャーね。

と、綾子がキッチンに向かう途中にキッチンの方から落下音。

綾子 なに？

再び、落下音。

綾子 ちよつと……。

大輔 母さん。(手招き)

綾子、戻る。

大輔、立ち上がる。

大輔 見てくる。
大和 俺も。
大輔 大和は残ってくれ。何かあったら、母さんと真綾を。
大和 ……分かった。
綾子 気を付けて。
大輔 うん。

大輔、ゆっくりキッチンに向かう。

大和 なんかないかな、武器的な、なんか。
真綾 椅子は。
大和 おっけ。(椅子を持つ) ちょっと重いな。
綾子 机の下にいた方がいいかしら？
大和 そうだね。あ、いや、逃げにくいから、やっぱり俺の後ろに。
綾子 うん。
真綾 なんか、かっこいいね。
綾子 立派になって。
大和 やめろよ、俺も怖いんだから。

真綾と綾子、大和の後ろへ。

真綾 泥棒かな？
大和 わかんないよ。
綾子 凄い音だったわね。
大和 大丈夫だから。気を付けて。いつ来るか分かんないだから。
母娘 うん。

緊張感のある静寂。

真綾 (英語の教科書を持って、たつぷり間を置き) ……May the Force be with you.
大和 フォースと共にあらんことを。なんで今スターウォーズ。
真綾 和むかなって。
大和 やめろよ。冗談じゃないから。
真綾 ごめん。
綾子 ちよつと二人とも。

子供ら、綾子に注目。

綾子 丁度良い下ネタ思いついたんだけど。
子供ら 絶対今じゃない。

大輔、ボウルや調理器具を持って戻って来る。

綾子 あ、お父さん。どうだった。

大輔 いや、誰もいなかった。窓も閉まっていた。

真綾 ほんとに？隠れてない？

大輔 いや、見てみたんだが。恐らく、誰もいない。

真綾 なんだ、よかった。怖かったー。

綾子 よかったわね。

真綾 うん。

大和 それは？（ボウルなどを示し）

大輔 ああ、さっきの音はこれが床に落ちた音みたいだ。

大和 なんだ、じゃあ、なに？地震とか？それで落ちたみたいな。

真綾 揺れた？

綾子 いやあ、どうかしらねえ。

大輔 いや、それが……。

綾子 どうしたの？

大輔 地震じゃないと思うんだ、その、なんというか。

大和 ああ、風とか。外そんなに吹いてるかな。

大輔 いや窓は閉まっていた。鍵も。

大和 じゃあ、なに？

大輔 その……。

真綾 どしたの？さっきから。

大輔 その、あー、なくなってるんだ。ボウルや調理器具を置いていた棚の一段、まるごと。

父以外 え？

大輔 ああ。棚、アルミラックの一段だけが、こう、まるごと。引き抜かれたみたい。それで、落ちたんじゃないか。うん、ちよつとわかりにくい。こう、テーブルクロス引きを失敗したみたいな感じで。

真綾 え、キッチン誰もいなかったんでしょ？

大輔 いなかった。

綾子 本当に？よく探したの？

大輔 ああ、目のつくところには、絶対。
大和 じゃあなくなるわけじゃないじゃん。そんな、棚の一部なんてでっかい物が。
大輔 そうなんだが、ないんだ。
大和 自然に外れたとか、ネジが緩んで。
大輔 取れていたんじゃない、なくなってるんだ。その棚の、面というか、床という
か、広いところが、一枚、どこにもないんだ。
大和 (釈然とせず) 見てくる。
真綾 あ、私も。

子供ら、キッチンに。
大輔、参っている様子。

綾子 お父さん、大丈夫？
大輔 ああ。こっちは大丈夫だったか。
綾子 ええ。大和がしっかりしてくれていて。
大輔 そうか。あいつも男の子だな。はは……。
綾子 本当に大丈夫ですか。
大輔 私は、大丈夫だ。それよりも、こういうことなんだ。
綾子 戸締りは、しっかりしてましたよね。
大輔 ああ、確認しただろう。玄関も、窓も、勝手口も。
綾子 本当に誰もいなかったんですか？
大輔 いなかった。何度も言っているだろう。
綾子 ごめんなさい。
大輔 いや、すまない。
綾子 泥棒なんですよね？
大輔 わからんよ、わからん。
綾子 また、警察に連絡しないといけませんね。
大輔 そうか、そうだな。いや、そうなのかな。
綾子 なくなってたんでしょう？なら、ほら、連絡しないと。
大輔 うん。そうだな。

子供ら、戻って来る。

大和 ほんとになくなってたよ。ごっそり。
綾子 そう。
真綾 うん。一段だけ。パーンって。

綾子 誰もいなかった？

大和 うん。冷蔵庫とか人が入れそうなところも一応見たけど。窓も閉まってたし、いないと、思う。

真綾 いたら会ってるよね私たち。足音もするし。

大和 うん。

綾子 じゃあ、どういうこと？

大和 わかんないよ。なくなったアルミラックも探したけど、見当たんなかったよ。

キッチンと逆側から落下音。

全員、顔を見合わせる。

大輔 ……行ってくる。

大和 また、残った方がいい？

大輔 ん、ああ、そうだな。

大輔、さっさと行ってしまおう。

綾子 ……あつちにいたってこと？

真綾 でも、ここ通らないと向こう行けくない？

綾子 そうだけど、窓を通ってほら、一回外に出て。こう、回って。

真綾 窓の鍵、外から閉めらんないじゃん。閉まってたよ、キッチン。

綾子 それは、そうだけど。

大和 いないよ、多分。

綾子 なんて？

大和 なんて、なんでって……なんとなく。だって、意味わかんないじゃん泥棒なら。

なんで、ボウルとかならわかるけど、なんでこういうの持って行かずにさ、アルミラックのパーツなんて、そんなの盗ってくのさ。

わからないじゃない、それは。それが必要な人だったのかも。

大和 どんな人だよ、それ。

綾子 ……アルミラックのパーツが足りない人。

大和 まんまじゃん。何も情報増えてないから、それ。

綾子 そうよねえ。

真綾 ねえ、泥棒じゃなきゃ、なに？

大和 知らねえよ。

真綾 フォースの力？ジェダイ？

大和 知らないって。

綾子 これ、どうしましよ。置く場所。(ボウルを示す)
大和 さあ……。

大輔、戻って来る。手には一杯の洗濯物。

綾子 どうしたの。

大輔 今度は物干しざおだ。

綾子 え？

大輔 洗面所の、物干しざお。干していた洗濯物が落ちた音だ、さっきのは。ハンガーも一緒に落ちたから、大きな音がしたんだろう。全部床に落ちていた。

大輔、ハンガーが付いたままの洗濯物を置く。

綾子 洗濯物……。

大和 人は？

大輔 いない。

大和 だよね。

真綾 窓も？

大輔 閉まっていた。

真綾 ……うん。

綾子 洗濯物が落ちたって、一回かかっている洗濯物のけないと、物干しざおなんて持って行けないじゃない。それで、落ちた音がするって、変よ。引き抜いたってこと？物干しざおだけを？無理よそんなの。

大輔 それはさっきもそうだろう。上に乗ってるボウルが乗ったまま、アルミラックだけを持って行く方法なんてない。なのに、物が落ちた音がした。床にはボウルが転がっていた。さっきと同じだ。
でも……。

大和 人じゃないんだよ。やっぱり。

真綾 人じゃなきゃなんなのって、じゃあ。

大和 知らないって、だから。

真綾 ヨーダ？

大和 お前スターウォーズ好きな。

真綾 うん、まあ。

大輔 消えているんじゃないのか。

間。

綾子 消える？消えるって。

大輔 盗られているんじゃないかって、持って行かれているんじゃないかって、消えているんじゃないか。フツと、自然に。

真綾 消える……。

綾子 消えるって、そんなことあるわけじゃない、馬鹿言わないで。泥棒よ、泥棒。私たちが怖がらせるために、やってるのよ。上手く、巧みに。

大和 無理だよ、そんなの。警察も家の周りについて、家に家族全員そろっていて、なくなつた瞬間に見に行ってるのに、それで何も、誰も見つからないなんて、人間業じゃないよ。

綾子 それは、分からないでしょ。相手がその、プロなんだから。

大輔 その……見たんだ。

綾子 ……なにを？

大輔 確認したんだ、ネジを。

綾子 ネジ？

大輔 キッチンを見に行った時に、アルミラックのパーツを固定していたネジを。少しも緩んでいなかった、まるで今締めたみたいに。パーツを盗った後にネジを締める。泥棒が、まさに今盗みを働いた泥棒が、そんなことをすると思うか？

綾子 それは……。

大輔 見たんだ。私は、見たんだ。私には、人がやったと思えない。

綾子 じゃあ、一体。

チャイムの音。

綾子 なに？

大和 ピザじゃない。

綾子 ああ……そっか。

綾子、去る。

大輔 大和。

大和 え、なに？

大輔 本当に物が消えていると思うか。

大和 知らないよ。ただ、人がやった、っていうのよりはいくらか信憑性があるんじゃないの、今の段階では。知らないけどさ。

大輔 本当に、そう思うのか。

大和 うん。わかんないけど、実際に物はなくなってるわけだし。

大輔 その、私は、私が、おかしくなったというの、ないか。

真綾 ちよっと、パパ、やめてよ。

大和 俺も真綾も確認しただろ、大丈夫だよ。

真綾 そうだよ。おかしくなんてないよ。

大輔 でも、物が消えるなんて、そんなことあるわけないだろう。絶対にありえない。

おかしだろう。

大和 ……ありえないよ、ありえないけど、今は、そう解釈するしかないだろ。人がやったんなら、何か証拠が出るかもしれないし、そうじゃないにしても、調べて貰って、ちよっとずつわかることじゃん、そうだろ。今そんな、おかしいか、おかしくないとか、その、言えないだろ。

大輔 ……。

真綾 (大輔の傍によつて) パパ。大丈夫。その、大丈夫だから。ね？

大輔 すまん、真綾、大和。すまん。

真綾 大丈夫だよ、気にしないで。

大和 うん。ピザでも食べて、ちよっと変だけどき、こんなときに。ゆっくりしようよ。

大輔 ありがとう。

大和 うん、いいよ。

真綾 なにピザかな？

大和 ミックスピザとツナコーンだよ。さっき決めただろ。

真綾 そっか。

綾子、戻って来る。

真綾 あ、ママ。ピザは？

綾子 ああ、その、ピザ屋さんじゃなかったの、今の。

真綾 え？

大和 誰だったの？

綾子 警察の人。

大和 ああ、連絡したの？

綾子 ううん。その、今、玄関先で教えていただいたんだけど。お隣さんとお向かいのおばあさんの家からも物がなくなってるって。

母以外 え？

大和 うちと同じってこと？

綾子 うん、ご近所中、みんな次々物がなくなってるって。

家族、顔を見合わせる。

大輔 消えてるんだ。

みんな、大輔を見る。

大輔 物が、消えていつてるんだ、この周りで。

沈黙。

暗転。

【二】

がたがたと音がする。落下音。

薄暗い舞台。

動き回る大和が辛うじて見える。

大和、椅子を持ってきてその上に立つ、そこで電球を変える動作。

大和、降りて電気のリモコンかスイッチを押す。

明るくなる舞台。

ダイニングの椅子一つと花瓶やクロスなどがなくなっている。

ダイニングテーブルの上にはこまごました物が積みあがっている。

大和 うし。母さん、取り替えたよ。

返事がない。

大和 母さん！替えたよ！電球！

綾子 (声のみで) うーん。ありがとう。

大和、椅子を片付けるなどする。

真綾、玄関側から来る。

真綾 ただいま。

大和 お、おかえり。

真綾 あれ、はやくない？部活は？

大和 こんな時にやるかよ。学校明日から休みだって。今日は早く終わったんだよ。
真綾 ああ、そっちもなんだ。
大和 真綾んとも？
真綾 うん。机とか椅子とか、黒板なくなったら授業できないでしょ。
大和 まあな。
真綾 そっち何がなくなったの？
大和 大体同じだよ。あ、一番騒ぎになったのあれかな、下駄箱。
真綾 うわ。
大和 中に入ってた上履きが全部散らばっちゃってさ。誰が誰のか分かんねえって。
真綾 あと、これ。(手紙を出す)
大和 なにこれ？あ、ラブレターだ、下駄箱の。やるねえ。でも、皆に見られちゃったわけだ、下駄箱がなくなっちゃって、ヒュー、恥ずかしいねえ。
大和 いや、俺のかどうかわかんねえよ？
真綾 ……は？
大和 誰のかわかんねえから、持って来ちゃった。
真綾 え、なんで。
大和 だって、誰のかわかんないだろ。俺のかもしれないし。じゃあ、早い者勝ちじゃない。
真綾 ラブレターにおいて早い者勝ちとかないから。え、怖。なにその発想。
大和 そっちは？なんかなくなっちゃった？
真綾 うちはあれなくなっちゃったよ。窓。
大和 窓？
真綾 うん、三階の窓が全部。昨日までは授業しますって言ってたのに、今朝になったら窓がなくなっちゃって、どうしようもないから明日からお休みだって。
大和 へー、やばいなそれ。
真綾 そんぐらいかな、大騒ぎしたのは。
大和 ふーん。
真綾 大変だった。夕方まで集会だったもん。お尻痛い。
大和 俺もそんな感じだよ。あ、替えたよ、電球。
真綾 ああ、そう言えば。朝、消えてたんだっけ。
大和 ホームセンター開いててよかった。昨日からコンビニも閉まってたからさ。
真綾 そりゃ、レジ消えちゃったらね。
大和 うん。大分どうしようもなくなってるよな。
真綾 私慣れちゃった。
大和 え、マジかよ。
真綾 だってどうしようもないじゃん。理由は分かんないけど、この街からドンドン

物が消えてって、なんか、もう慣れたよ。何もできないし、理由もわかんないし。そのうち学校ごと消えたりするんじゃないかな。

大和 あんなでっかいのが？

真綾 わかんないけど。だって、まず理由がわかんないじゃん。じゃあ、何が起るかもわかんないし。

大和 まあ、な。

真綾 (机の上の物を見て) ねえ、これなに？

大和 え？これ？なんか目に見えないところで物が消えるからさ、貴重品はここに置いてこうって、父さんが。一番人がいるから、ずっと視界に入ってたら消えないんじゃないかって。

真綾 あー、なるほど。(小さな箱を示し) これなに？

大和 へその緒。お前のと俺の。

真綾 いるこれ？

大和 母さんが置いた。

真綾 ああ……。

大和 うん。

真綾 ママ、大丈夫？

大和 大丈夫、じゃないかも。

真綾 え？なにかあった？

大和 いや、なんもないけどさ、なんか、受け入れられないみたいで。凄く参ってる。

真綾 受け入れられないって、消えるのを？

大和 うん。今も、向こうでぼーっとしてる。

真綾 そっか……。

大和 仕方ないだろ。物が消えるなんてさ、ありえないだろ、普通。なんか疑いたくなるよ、色んなことを。

真綾 色んなって、なに？

大和 なんか、政府の陰謀とか宇宙人とか、そういうの。

真綾 映画の見過ぎじゃない？

大和 映画みたいなもんだろ、今、この状況が。

真綾 まあ、そっか。

大和 安心したいんだよ。理由がないより、なんかそれっぽい理屈があった方が良いだろ。

真綾 そうかな。

大和 怖いだろ、理由がないのなんて。

真綾 宇宙人とかのほうが怖いかも。

大和 来るかもな。

真綾 なにが？

大和 ヨーダ、宇宙人だし。

真綾 いいね、それ。

大和 スターウォーズ好きなの。

真綾 うん。

大和 そういや昼飯は？食堂やってたか？

真綾 ううん、食堂は止まってたけど。学校の近くのスーパーが。

大和 やってたの？

真綾 うん。なんか一軒だけ。そこで弁当買って。

大和 混んでなかったか？

真綾 逆にいなかった。皆なんかそういうこと考えてる場合じゃないんじゃないかな。

大和 ああ、なるほど。

真綾 うん。着替えてくる。

大和 ああ。

真綾、去る。

大和、テレビの電源を点ける。何をするでもなくじっと見る。

綾子、来る。

大和 あ、母さん。大丈夫？

綾子 大丈夫よ。

大和 うん。

綾子 携帯見たら、お父さんからラインが来てて、お父さん帰って来るって。

大和 あ、そうなの。

綾子 十五分前くらいに来てたから、もうすぐ帰って来ると思う。

大和 じゃあ父さん明日休みかな？

綾子 そこまでは分からないって。

大和 そう。

綾子、弱弱しく座る。

大和 なんかも飲む？

綾子 ううん、いい。ありがとうね。

大和 ああ、うん。

沈黙。

大和 いまテレビでさ、明日になったら自衛隊の人が来るって。食料とか支給される。水は、水道まだ出るけど、一応それもだつて。

綾子 そう。

大和 うん。その小学校に来るって。朝一番に行こうよ。俺休みだし。二回並んだら怒られるかな？怒られるか。

綾子 うん。

大和 うん。なんか凄いニュースになってるよ。ワイドショーにさ専門家の人が来てさ、なんの専門家だつて思つて見てたら経済の専門家だったりすんの。経済関係あんのかな。絶対ないよね。まだ、なんか物理学とかさ、せめて犯罪心理学とかさ、ねえ、呼ぶならその辺だよ。

綾子 うん、そうね。

大和 でもさ、そのうちテレビも使えなくなるかもね。テレビ本体はさ、ここにあるからそう消えないだろうけど、アンテナとかさ、ほらチューナーとかそういうの？消えちゃったら、見れなくなっちゃうよね。今のうちにラジオとか用意しとかないと。

綾子 ラジオはなくなったわ、昨日見たらなくなつてた。

大和 あ、そうなの。じゃあ、どうしようか？

綾子 携帯電話、まだ使える。

大和 ああ、それもそうか。ガスとか電気が使えるのが奇跡だね。

綾子 ねえ、なくなつてない？

大和 なにが？

綾子 アルバム。

大和 ああ。(机の上を確認して) あるよ、ほら。

綾子 うん、取つて。

大和 はい。

綾子 ありがとう。

綾子、パラパラとアルバムを捲る。

綾子 ほら、これ、大和が生まれた時の。

大和 ああ、うわ、しわくちゃでやんの。

綾子 ね、生まれた時は未熟児でね。ちっちゃかったわ。

大和 あ、そうだったの。

綾子 うん。ほら、この産着。箆筒のね、奥に仕舞つてたのよ。折角だから、なにか記念にと思つて。結婚式とかに持って行こうって。

大和 ふーん。

綾子 一昨日、見たらなくなってた。

大和 ……。

綾子 捨てられなかったの。真綾のおしゃぶりとか、積み木とか、あと、幼稚園の制服とか、使ったおむつとか。

大和 おむつは捨てなよ。

綾子 そういうのもなくなっちゃうのかしらね。

大和 ……大丈夫だよ。そのうち終わるさ。それに、ほら、なんとか生きてるわけだし。うん、なんとかなるよ。

綾子 うん。

大和 なくならないよ、うん。

綾子 そうね。

大和 大丈夫だよ……コーヒー淹れてくる。

綾子 うん。

大和、キッチンに。

綾子、テレビを見る。

綾子 ……大変ねえ、みんな。

大輔、帰って来る。

大輔 ただいま。

綾子 あ、お父さん。おかえりなさい。

大輔 ただいま。大丈夫だったか？

綾子 お父さんも、大和もそればかり。

大輔 なにがだ？

綾子 大丈夫かって。

大輔 ああ。

綾子 大丈夫よ。物はなくなってるけど。

大輔 そうか。ラインでも言ったが、うちの会社はパソコンが何台かやられてな、仕事もほとんどできないから退社になった。

綾子 明日はどうなるの？

大輔 朝には連絡が来るそうだ。

綾子 そう。

大輔 今日は何がなくなったんだ？

綾子 さあ、分からないわ。まだすっかり確認してないから。
大輔 そうか。
綾子 アルバムはあるわ。大和と真綾のへその緒も。
大輔 ああ。良かったな。
綾子 うん。これは、失くしちゃだめなものね。
大輔 うん。(アルバムをパラパラと捲る) これ。
綾子 ん？
大輔 この写真、持っておいていいかな？
綾子 え、どの写真？
大輔 今年の年始の、家族の集合写真。
綾子 ああ、この時寒かったわね。
大輔 正月の大寒波。神社の石段が凍って、大変だった。
綾子 お父さん、登るって聞かないんだから。
大輔 年始だからな、きちんとしたかったんだ。これ、持っていていいかな。
綾子 どうして？
大輔 肌身離さず持っておいた方が、なくならない気がするんだ。
綾子 ……そうね。
大輔 これは持っておくよ。なくならないように。
綾子 お願いします。
大輔 うん。(アルバムから写真を一枚剥がして懐に)
綾子 私も一枚、持っておきましょうか。
大輔 うん、そうしなさい。
綾子 そうねえ。(捲る) ……ねえ、お父さん。
大輔 なんだ。
綾子 ここ、大和が小学校に上がった頃。
大輔 ……ああ。
綾子 皆で、校門の前で撮りましたよね。大和が動き回って、中々良いのが撮れなくて、何枚も撮りなおして。
大輔 そうだったな。
綾子 消えてる、全部。
大輔 ……そうだな。
綾子 ねえ、なんで？
大輔 わからんさ。
綾子 なんでなの？なんで、こんなに消えてくのかしら。
大輔 わからん。なにか原因があるのかもしれないし、原因なんてないのかもしれない。
大輔 い。

綾子 原因がないなんて、そんなことある？
大輔 ……わからんよ。一枚だけでも、取って身につけておきなさい。
綾子 うん、うん。(捲り)これにします。大和と、真綾の生まれた時の写真。二枚持
つておくわ。
大輔 ああ、そうしなさい。
綾子 二人にも持っていてもらいましょう。
大輔 ああ、それがいいかもしれないな。

真綾、来る。部屋着になっている。

真綾 あ、パパ。おかえり。
大輔 真綾、ただいま。
真綾 会社も早く終わったの？
大輔 ああ。学校もか。
真綾 うん。大和ももう帰って来てるよ。
大輔 そうか。
綾子 真綾、こっち。(手招き)
真綾 え、なに？
綾子 (アルバムを見せ)これ、ここから一枚選んで。
真綾 なんで。
綾子 持っておいてほしいの。なくならないように。
真綾 ああ。持ってたらなくならないの？
大輔 わからんが、身に着けている服や携帯電話がなくなっていないんだ。確率は低
くなるかもしれない。
真綾 なるほどね。えー、じゃあ、どれにしようかな。アルバム全部は？駄目？
大輔 重いだろう。
真綾 そっか。ママ、なににしたの？
綾子 二人が生まれた時の写真。(見せる)
真綾 うわ、ちっちゃーい！いいなあ、私も赤ちゃんの頃の写真にしよっかな。あ、
これ！保育園の時に川に泳ぎに行ったやつ！これにしよう！
綾子 真綾、まだ泳げなかったでしょ。
真綾 うん、そうなんだけど。覚えてるよ、楽しかったなあ。カニとか集めたりして。
ママも一緒に探したじゃん。
綾子 そうね。
真綾 ね、落ち着いたらさ、もう一回行きたいな、ここ。
綾子 もう泳げるの？

真綾 泳げるよ、体育の授業でも泳がされるし。

綾子 ほんとかしら？

真綾 ほんとだよ。あの頃とは違うよ。

大輔 確かあの時、大和はまだ小さいのに川に飛び込んだな。

綾子 そうそう。足がつかないところだから、お父さんの方が心配して。でも、割とスイスイ泳いじゃうもんだから、お父さんも私もびっくりしちゃって。

大輔 昔から変なところで肝が据わっていたからな。

真綾 そうそう。ジェットコースターとかもさ、全然怖がらないから一緒に乗ってつままないんだよね。あ、一番ひどいのお化け屋敷。「あそこ、来るな」とか言っ

ちやうの。で、当たるし。お化けの人も「分かってましたよね」とか言っちゃうし、貫けよ、お化け。

大和、珈琲を持ってくる。カップは全く統一感がない。

大和 あ、父さん。おかえり。

大輔 くださいま。

大和 しまった、父さんの分淹れ忘れてた。淹れてくるわ。

綾子 いいわよ大和、私が淹れてくるから。

大和 そう。ごめん、お願い。

綾子 うん。あ、アルバム。

大和 え？

綾子 あ、お父さんから聞いて頂戴。

大和 え、うん。

綾子、キッチンに。

大和 なに？

真綾 写真選んでるの。

大和 写真。

大輔 なくならないように、持っておくんだ一枚か二枚。

大和 へー、何選んだの？

真綾 ほら、川！

大和 ああ、懐かしいな。これあれじゃない、小学校入ったぐらいの頃でしょ、俺が。

真綾 私まだ保育園だよ。

大和 そうそうそう、お前泳げないから岸で遊んでたやつな。へー、懐かしいな。こ
う見ると結構写真撮ってるんだな。あ、これ。いいな。

真綾 なに？

大和 ほら、中学の体育祭の時の、リレー、アンカーだったやつ。

真綾 うわ、すごい良い写真じゃん。ゴール前の最後のカーブ。

大和 隣の組の奴とデッドヒートでさ。結局負けたんだけどさ。

真綾 パパが撮ったの？

大輔 ああ、確か。

真綾 よく撮れたね、こんな良いところ。

大輔 覚えてるよ。母さんが席を取っててな。大和の良い写真が撮れるようになって。

真綾 私は大和がアンカーなんてこと、当日まで知らなかったんだが。

真綾 言っただけだったの。

大和 え、いや、恥ずかしいだろ、わざわざ。

大輔 母さんが教えてくれてな。それで、その一枚だ。

真綾 へー。

大和 これにするよ、なんかよく覚えてるし。

大輔 そうか。

真綾 大和、めっちゃ自分の写真じゃん。

大和 え、みんな、違う感じ？自分のじゃないの？

大輔 集合写真。

真綾 私も。母さんは私たちが生まれた時の写真。

大和 えー、なんだよ。俺が自分大好きみたいじゃん、なんかやだなー。

大輔 いいんだよ。とにかく、二人とも写真を手放さないように。

真綾 うん。

大和 アルバム、結構しつかり作ってたんだな。

大輔 母さんが好きなんだ、アルバムが。

大和 そうなんだ。

真綾 え、じゃあさ、パパとママが付き合ってた頃の写真とかもあるわけ？

大輔 あるんじゃないか？見せて貰ったことはないが。

真綾 えー、みたくない。母さんの部屋かな？

大輔 あまり見て欲しくないんだがな。

真綾 えー、なんでいいじゃん。

大和 二人が付き合ってる時とか全然想像できないな。

真綾 ね、気になるよね。

大輔 やめなさい。恥ずかしい。

真綾 照れてるね。

大和 な。

と、電気が消える。

大和 わ。

真綾 なに？

綾子 (声のみで) キヤッ!

大輔 皆動くな! 電線かなにかがなくなったのかもしれないな。

大和 えー、折角電球替えたのに。

真綾 すぐ直るかな?

大和 電線なくなったら無理じゃない?

真綾 え、じゃあしばらく暗いまま? やだー。

大和 ブレーカー、父さん、ブレーカーどこだっけ?

大輔 玄関の方だ。大和、携帯のライトあるか?

大和 ちよいまって。携帯机の上に置きちゃったから。

真綾 私の部屋だ。パパは?

大輔 靴の中だ。今探してる。

大和 あ、あったこれかな。あ、違う。へその緒の箱だこれ。えっと、どの辺置いたっけ。

と、電気が点く。

大和 あれ。

真綾 点いた?

大和 なんだったんだ。

大輔 ブレーカーを見てくる。大和、携帯を持っておきなさい。

大和 ああ、うん。あ、あった。(携帯を持つ)

大輔、玄関の方へ。

大和 電気消えてる時さ、携帯かと思ったら、お前のへその緒の箱だった。

真綾 なんで間違えるの。

大和 いや、サイズがさ。

真綾 中、出てない?

大和 出てない出てない。開けてないし。

真綾 なんだったんだらうね。

大和 さあ。なんか、どっかまたなくなったんだろ。

真綾 すぐ点いたのに?

大和 電気詳しくないから分かんねえよ。
真綾 ママ、大丈夫かな。
大和 大丈夫じゃない。すぐ点いたし。
真綾 そっか。
大和 ……あれ？
真綾 なに？
大和 アルバム、アルバムがない。
真綾 え？
大和 さっきここ置いてたよな。
真綾 うん。床は？
大和 え？えっと、ないよ。
真綾 消えた？
大和 ああ、多分。タイミングがいいんだか悪いんだか。
真綾 写真、持つといてよかったね。
大和 ある？
真綾 ある。そっちは。
大和 大丈夫。はー、まじかよ。なんか、母さんじゃないけど、ショックだな。
真綾 ママには、言わない方がいいよね。
大和 うん、だろうな。
真綾 なんか、やだね。消えてくの。
大和 慣れたんじゃないの。
真綾 でも、目の前で消えられると、ね、やっぱり。
大和 ああ、だよな。ほんとに、消えてるんだな。
真綾 うん。

大輔、戻って来る。

大輔 ブレーカーは大丈夫そうだ。こっちは？
大和 無事だけど。
真綾 アルバムが。
大輔 消えたのか。
大和 うん。
大輔 そうか。まあ、タイミングが良かったと考えよう。写真を選ぶ前だったらと考える。
大和 そうだね。
真綾 なんて消えたのかな、電気。

大輔 わからん。窓から近所を見てみたが、今はどこも停電していないようだ。
大和 取り敢えず復旧したからいいんじゃない？
真綾 超樂觀的じゃん。
大和 だってよくわかんないし、なんで消えたか。どうしようもないだろ。
大輔 取り敢えずいつインフラが止まるかもしれない。準備をしておこう。
真綾 水道とか止まったらやばいもんね。
大和 あ、明日自衛隊来るらしいよ。
真綾 え、ほんと？
大和 うん、食料と水配るって。
大輔 どこでだ？
大和 その小学校で。朝から。
真綾 じゃあ、水は大丈夫？
大輔 だが、備えるに越したことはないだろう。あまり、頼りすぎるのよな。
大和 取り敢えず明日は朝一で母さんと一緒に行ってくるよ。
大輔 私も行こう。
真綾 え、ならみんなで行こうよ。折角だし。
大和 なんの折角だよ。
真綾 さあ、でもなんかそうそうないじゃん。四人で一緒になんかするって。
大和 そうだけど。
大輔 じゃあ、明日は朝一で小学校だな。
真綾 うん。
大和 おっけー。
大輔 母さん遅いな、少し見てくる。
大和 あ、晩御飯カップ麺だって。そのお湯沸かしてるのかも。
大輔 うん。それも見てこよう。

大輔、キッチンへ。

真綾 食料ってさ、何貰えるのかな。
大和 缶詰とかだろ。
真綾 カニの？
大和 なんでだよ。んな高級なのじゃなくて、サバとか。
真綾 生臭っ。
大和 いいだろ、サバの味噌煮。美味しいじゃん。
真綾 アレルギーとかあんじゃん。
大和 お前別にサバアレルギーじゃないだろ。ていうかカニにもあるだろアレルギー

は。

真綾 生臭くはないじゃん、カニは。

大和 じゃあ、時雨煮。

真綾 なにそれ。

大和 牛肉煮たやつ、ゴボウとかネギとかと。

真綾 なんで時雨なの？

大和 え？

真綾 なんで時雨煮？

大和 なんかあれじゃない。雨の日に作るんじゃない、まとめて。ほら、漬物もまとめて作るじゃん。そんな感じじゃない？

真綾 へー、レアもんじゃない。

大和 レアか？

真綾 いわゆる時期限定品でしょ？

大和 知らないけどな。

真綾 でもカニがいいなあ。

大和 絶対ないだろ。

真綾 ウニ。

大和 缶詰あるか？

真綾 さあ、あるんじゃない。トマトの缶詰あるし。

大和 トマトとウニ同列なのかよ。

真綾 似てるじゃん、形が。丸いし、色もオレンジっぽいし、似たようなもんでしょ。

大和 中身もドロドロだし、トマトを缶詰に出来たら絶対できるでしょ。

大和 よくよく考えたら、炊き出しとかなんじゃないか。ほら豚汁とか、よく見るよテレビで。

真綾 あー、そういう缶詰配ってるイメージあんまないかも。でもさ、缶詰でもいいよね。

大和 保存できるしな。

大輔、キッチンから戻って来る。

両手に綾子の着ていた服と写真を持っている。

大和、大輔の存在に気付く。

真綾

でも、炊き出しならなにがいいかな、カレーとかうどんかなあ。私、うどんがいいなあ。サツと食べれるし、あんまり濃い味じゃないし、脂っこくないし、ねえ。なに？どしたの？（振り返る）

子供ら、固まる。

雨の降る音、唐突に。
沈黙。

真綾　パパ、服……それ、ママの。
大輔　ああ……雨か。

写真が大輔の手から落ちる。
大和、写真を拾う。

大和　これ、俺の、生まれた時の……。

大和の拾った写真を奪い、見る真綾。

真綾　……これ、私。

子供ら、泣きそう、もしくはすでに嗚咽。

真綾　ママ、ママ？
大和　母さん……。
大輔　母さんが、母さんが、消えた……消えた。

ゆっくりと暗転していく。

【四】

がたがたと落下音がする。
やがて聞こえるテレビの音。
徐々に明るくなる。

ダイニングから裝飾がほとんど消え、椅子も一つだけになっている。
玄関に続く扉もなくなっている。

机の上の物は殆ど無い。
椅子に突っ伏している真綾。
床に座っているスーツ姿の大輔、綾子の服を握りしめている。眠っている様子。
玄関から来る大和、手には袋。中には水と缶詰。

大和 ただいま。ただいま、真綾。(肩を揺する)

真綾 うん、うん。

大和 寝てたのか？

真綾 うん、ちよつとだけ。

大和 寝るなら横になれよ。疲れるだろ逆に。

真綾 だって、怖いから。あんまり、目つむりたくない。

大和 俺も、父さんもいるから、安心しろよ。

真綾 うん、でも、怖いんだ。

大和 ……うん。ご飯、貰ってきたよ。

真綾 うん。

大和 なんか、自衛隊の人もどんどん物が消えるから炊き出しできないって。缶詰配つてたよ。ほら、カニ缶じゃないけどさ。

真綾 うん。

大和 食えるか？

真綾 ……後で。

大和 おつけ。じゃあ、俺も後で食うよ。皆で食おう。

真綾 うん。

大和 水飲むか？

真綾 今は、いい。

大和 そっか。父さん。

大輔、反応しない。

大和 (近づき) 父さん、父さん！

大輔 ……なんだ、大和。どうしたんだ。

大和 飯、貰ってきた。

大輔 ああ、置いておいてくれ。

大和 水は？

大輔 ああ……置いておいてくれ。

大和 ……ああ。父さんも、横になった方が良いよ。

大輔 ……いや、大丈夫だ。

大和 大丈夫じゃないよ。絶対に横になった方が良い。休まないと身が持たないだろ。

大輔 ……ああ、そうだな。すまん。

大和 うん。布団、ここに持ってこようか。床のままだとあれだろ。

大和、立ち上がり行こうとする。

大輔、大和を掴む。

大輔 行くな。

大和 ……。

大輔 ここから、出ないでくれ。この、ダイニングから。

大和 でもさ、横になった方が良いぜ。布団、あった方がいいだろ。

大輔 行くな、行かないでくれ。頼む。

大和 でも、

大輔 行くな！

大和 (大輔の手を持ち) わかった。行かないよ。行かない。

大輔 ああ。すまん。ありがとう。

大和 うん。

大和、大輔から離れる。

大和、袋の中を漁る。

大和 二日ぐらい大丈夫かな、多分。

真綾 なんの缶詰なの？

大和 炊き込みご飯だって。

真綾 そんなの缶になるんだね。

大和 うん。自衛隊の人が食うのと同じだって。

真綾 へー。

大和 食うか？

真綾 ううん、聞いただけ。

大和 そうか。食いたくなったら言えよ。

真綾 うん。

大和 折角外行って貰ってきたんだから。

大輔 ……外に出たのか。

大和 ああ。

大輔 なんて外に出たんだ！

大和 行かないと、飯貰えないだろ、水も。

大輔 ここにいてくれ。いつ消えるか分からないんだぞ！

大和 でも、二人とも寝てたから、ただでさえ疲れてるのに起こすのも……。

大輔 そんなことはいいんだ！ここにいろ！ここにいさえすれば、家族三人揃ってさ

えいれば消えないんだ！

大和 でもここにじっといても、食うもなくなつて死ぬよ！誰かが行かなきゃしよ

うがないんだよ！

大輔 お前まで、お前まで消えるつもりか！母さんみたいに！

大和 そんなつもりないよ！でも、しょうがないだろ……。

大輔 わかるだろ、母さんは、母さんがいなくなって、お前まで居なくなるなんて。

大和 わかるよ、わかるけどさ、それでも死にたくないよ。死なせたくないよ！

大輔 消えたら、死んでも同じなんだぞ！

大和 分からないだろそれは！母さんも、どこかで、どっかで！

大輔 そんなこと、そんな、どこにいるっていうんだ！

大和 それは分かんないけどさあ！

真綾 やめてよ！そんな喧嘩することないじゃん！三人になってまで。

大和 俺だって、したくないよ。

真綾 今度からは三人で行けばいいじゃん。三人で一緒にいればさ、大丈夫でしょ？

大輔 ……。

真綾 ね？

大輔 そうだな。

真綾 うん。

大和 ごめん。熱くなった。

大輔 いや、私が、親なのに、すまん。

大和 いいよ、ごめん。

大輔 すまん。

大和 ……飯食おうよ。二人ともほとんど食ってないだろ。

大輔 ……ああ。

大和 真綾も、食わないと。

真綾 うん。

大和 食えるか？

真綾 食べて、みる。

大和 よし。

大和、袋から缶詰とスプーンを出す。

大和 炊き込みご飯、タケノコのと鶏肉のあるっぽいけど。

真綾 タケノコ。

大和 はい。(渡す) 父さんは？

大輔 ……先に選びなさい。

大和 んじゃ、鶏。はい。(袋ごと渡す)

大輔 ああ。(適当に取り出す)

三人、めいめいに缶を開けて食べる。
真綾は椅子、大輔は床、大和は机の縁に腰かけている。

大和 悪くないな。

真綾 うん、おいしいね。

大和 ああ。結構いけるな。冷たいけど。

真綾 温めてくれればいいのにね。

大和 ああ、ほんとに。

真綾 車にさ、電子レンジ積んでないのかな。

大和 さあ、あってもみんなの分は温めらんないだろ。

真綾 うちの電子レンジもね、消えたんだ。

大和 知ってるよ。俺も見たもん。

真綾 そだっけ。

大和 うん。三日前ぐらいだろ。

大輔 五日前だ。

大和 ……そっか。

真綾 もう、なにが消えたのか覚えてないね。

大輔 なにが残ってるのかも分からん。

真綾 うん。

大和 電子機器で生き残ってるのは、もうテレビと携帯ぐらいだよ。携帯は回線入らないけどさ。

真綾 電波入らないんだ。

大和 お前、自分のは。

真綾 充電してない。誰からも連絡来ないし。

大和 そっか。今、電波入らないんだよ3Gも。多分基地局が消えたんじゃないかな。

真綾 あんなでっかいのが。

大和 うん、多分。

大輔 ……こんな時でも、テレビは大丈夫なんだな。

大和 アンテナがまだ生きてるんだろうな。何局かはもう見れないけどさ。

真綾 なくならないでよかったね。ニュース見れるし。

大和 情報があるのはありがたいよ。ほとんどの家はもう見れないって、配給に来てた人が話してた。

大輔 そうか。

大和 うん。ウチより酷いところもあるって。テレビも何も使えなくなったり、椅子とか全部なくなったり。でも、その、人が消えたってのはまだ聞いてない、か

な。

大輔 ……そうか。

大和 ごめん、今する話じゃなかった。

大輔 いや。

大和 うん、ごめん。

気まずい沈黙。

大和 やっぱり、引越しになるのかな、最終的に。

大輔 ああ、隣の市に行けば大丈夫なんだろう？

大和 TVが言うにはね。

真綾 なんてまだ避難できないの？

大和 原因が分かんないからって言ってたけど、それもどこまで本当か。市の境目に
検問があるって話もあるけど。

真綾 ……怖いね。

大和 うん、わけわかんないよ。

大輔 準備が出来たらなにか連絡があるだろう。

大和 だいたいけどね。

大輔 あるさ、連絡はきつと来る。

大和 ……うん。

どこからか、落下音。

三人、一瞬ビクツとするがすぐに食事に戻る。

大輔 消えたか。

大和 何かな。

真綾 考えたくない。

大和 うん。ごめん。

真綾 あの音のせいでね、あんまり眠れないんだ。

大和 ……俺もだよ。

真綾 あの音が来るたびに、ママが、ママがいなくなったんだって、考えちゃって…
…。

大和 いいよ、もう考えるな。ほら、全然進んでないぞ、飯。

真綾 うん。

大和 ここは大丈夫だから。

また、どこからか落下音。
何度も、何度も。

真綾　ねえ。

大和　うん。

真綾　大丈夫だよね。

大和　なにが。

真綾　消えないよね、家とか……私とか。

大和　おい。

真綾　だって、怖いよ。だって、ママは、ママがあ……。

大和　やめろって、もう考えんな。大丈夫だよ。三人いるんだから。

真綾　でも、ママはもう。

大和　やめろってのに。

大輔　大丈夫だ。

子供ら、大輔を見る。

大輔　大丈夫だ。大丈夫だよ。大丈夫さ。

大輔、綾子の服をギュッと握りしめる。

大輔　こうしていれば、消えないさ。消えないんだ。

大和　……ああ。

真綾　……大和、写真持ってる？

大和　うん、持ってるよ。

真綾　見せて。

大和　ほら。(渡す)

真綾　……よく撮れてるよね。

大和　うん。

真綾　ありがと。(返す)

大和　ああ。

真綾　パパも？

大輔　ああ、持ってるよ。(見せる)

真綾　うん。大丈夫だよね。

大和　ああ、大丈夫だよ。大丈夫なんだよ。

真綾　忘れなければ大丈夫だよね。

大和 ああ。大丈夫だよ。忘れない。
真綾 うん。私も忘れない。
大和 そうだよ。大丈夫なんだ。
真綾 うん、ごめん。
大和 母さんの写真は？
大輔 ちゃんと持つてる。二枚ともだ。
大和 そっか。
真綾 アルバム、消えなきやよかったのにな。
大和 うん。
真綾 寂しいね。
大和 うん。
真綾 大和の誕生日にさ、作ったことあったよね、炊き込みご飯。大和が、和食のが好きだからって。私はハンバーグが良かったんだ。
大和 お前、好きでもないな。
真綾 ご飯、ママのご飯……。 (泣き始める)
大和 ……しっかり食えよ。動けなくなるぞ。
真綾 うん。
大和 水いるか？
真綾 うん。
大和 (袋からペットボトルを出し) ほら。
真綾 ありがとう。
大和 父さんは？
大輔 いや、大丈夫だ。
大和 うん。

三人、食べる。

沈黙とテレビの音、落下音。

大和 御馳走様。
真綾 早いね。
大和 まあ、缶詰だし。水。
真綾 うん。(ペットボトルを渡す)
大和 ありがとう。ゆっくり食えよ。
真綾 うん。でも、もういいかな。
大和 大丈夫か。食わないで。
真綾 ほとんど動いてないから。

大和 食つといた方が良いぞ。

真綾 ほんとに大丈夫。

大和 そっか。

大輔 真綾、少し寝た方が良い。

真綾 うん。

大輔 布団を取りに行こう。横になれるように。

大和 父さんもちゃんと食いなよ。

大輔 いや、私も、実はそんなに食欲がないんだ。また、ゆっくり食べるよ。

大和 大丈夫？

大輔 ああ。それに、私も少し眠い。

大和 そう。じゃあ、取りに行こっか。三人、一緒に。

真綾 うん。

大輔 ああ。

大和 三人分、なくなつてないといけどな。

真綾 だね。

大輔 その時は、カーテンでも使えばいいさ。

子供ら ……。

大輔 違うか。カーテン。

子供ら ……。

大輔 カーテン……。

大和 カーテンは嫌だなあ。

大輔 そうか……。

大和 ははっ……。

真綾 アハハ。

大和 ははははははっ！

大輔 ふふ、アハハハハハ！

真綾 アハハハハハ！

大和 ははははははっ！

三人、しばらく笑う。

大和 なんで、こんなおかしいんだろ。

真綾 さあ。

大輔 私も分かん。

大和 変なの。

真綾 変だよ。

大輔 変だな。

大和 ……取りに行こう。

真綾 うん。

三人、去る。

テレビの音ははっきりと聞こえる。

テレビ また、最近（好きな所）市で発生している、物が消えていく怪現象についてですが、これに非常に酷似した現象が近隣の市や県でも確認されているとのことです。原因は未だに不明ですが、専門家によればこの現象は現在一定の速度で範囲が拡大しているとのこと、最短で一年の内に日本全国に広まる見込みだそうです。現段階で被害総額は十億円以上とされており、今後の自治体及び政府の対応に注目が寄せられています。また、先週から派遣が始まった自衛隊による配給及び給水は今後も継続して行われるとのこと。以上スタジオからお伝えします……。

テレビの音、途切れ、砂嵐になる。

暗くなるダイニング。

音楽。

音楽の盛り上がりと共に砂嵐の音が大きくなる。

その間を縫うように、物が落下する音。

あるいは、何人かの小さな悲鳴。

大輔 消えて、消えて、消えていくんだ。

砂嵐が聞こえる。

【五】

砂嵐が徐々に小さくなり、ある瞬間ブツリと消える。

薄暗いダイニング。

そこに物は殆どなく、椅子が一つとほんの少し散らかっているばかり。

薄い布団が一枚床に転がっている。

椅子に座り写真を眺める大輔。

大輔 ……。

落下音。

大輔 ……また、なにかが消えた。なにもかも消えた。

落下音。

大輔 (写真を捲りながら) 消えた。消えた。消えた……消えた。

落下音。

大輔 消えていくんだ、なにもかも。やがてここも、私も。

落下音。

以後、適当なタイミングで落下音が鳴り続ける。

大輔 ここも、あそこも、私も、あなたも、お前も、どこも、かしこも、みんなみんな、みんなみんなみんな！消えていくんだ、どうしようもなく、理由もなく、一つ一つ、消えていくんだ。そうやって消えていった。消えていったんだ……。

大輔、写真を床に落とす。

大輔 あるいは、消えたのは私で、みんなは別の場所で私が消えたことに驚いているのかもしれない。でも、そんなことはどうだっていいんだ。どうだっていいんだ。問題は、家族が、この場所がバラバラになって、恐らくもう二度と会えなくて、それが、それが、なんの理由もないことだ。理由もなく、消える。理由もなく消えるんだ、やがてなにもかも。そういう時がいつか来るということだ、それが今だったということだ、それが問題だ。

大輔、立ち上がる。

大輔 ここは、ここは、食卓、ダイニングだ。家族の憩う場であり、食事を楽しむ場であり、団欒をかみしめる場だ。なのに、今はもう何もかも消えて、消えてしまっただけで、それで、私も、もう、あるいは、消えてしまっただけで、なにもかも！なにもかもが消えてしまったその後で！ようやくやくにして、そういった家族の楽しみを思い出して！後悔と、何故という疑問と、怒りと、無力とそういった諸々を

ないませにして！ここは、ここがダイニングだと、私は、言い張るんだ。それが、せめてもの、私の、私の、最後の仕事だと思う。ここは私たちのいた場所で、思い出すに値する場所で、そしてなにもかをも包んだ場所で、それで、ここは私たちの確かにいた場所であつたと、証明する為とか、主張する為ではない、ただそうしなくては私が、私を保てないからだ。恐怖で飲まれてしまうからだ。生きるということは、結局そう言った恐怖から、逃げ続けることなのだろう。何かを訴え、もつともらしい理由を付けてなんとか、なんとか、なんとか、毎日から逃げてきたんだ。何も変わらないんだ。何も変わらない。ここは、ここに私たちはいたんだ。そう言った日々と何も変わらないんだ、何も変わらない。だから私は、何も変わらず、訴えを……そうしていくつかの訴えのために、訴えを……。

ここはダイニング、食卓、即ち家族が食事を楽しむ場所！ここはダイニング、食卓、即ち家族が食事を楽しむ場所！ここはダイニング、食卓、即ち家族が食事を楽しむ場所……。

大輔、幾度となく繰り返す。

暗くなる舞台。

ある瞬間、落下音と同時に大輔の声も止まる。

もうなにも聞こえない。

終わり。